室町・同朋衆の源流

文と写真、構成 ＝ 樹心院 華林

発行 ＝ ２０１１年１０月（彩流華第２１号）

床飾りの完成

日本の床飾りや華道の原点は室町時代の足利将軍家といわれます。

この床飾りは「荘厳＝しょうごん」という言葉でも表現され、芸術的な、あるいは信仰感覚をまじえた深い意味での飾り付けを意味しています。当時は芸術も信仰も今日の感覚とは少し違い、とくに「芸道」と呼ぶときは今日の両者の中間的なものと言うことができます。生け花をふくめた床飾りはたんなる作法やきまりごとではなく、国家安泰を祈ったりすることにもつながる神秘的な側面をつよく持ち合わせたものでした。

この床飾りが完成したのは、室町幕府の八代将軍足利義政が京都・東山にいわゆる銀閣寺を造営し、ここで将軍の同朋衆がおこなった床飾りだと言われています。時代は皮肉なことに、あの悲惨な応仁の乱が終わり将軍の威信がおおきく失墜した直後のことでした。

芸道でも信仰でも、いちばん大切なことは秘伝や口伝とされ、ときにただ一人の信頼できる弟子にだけ秘密裏に伝授されるという時代ですから、この銀閣寺で同朋衆が完成させた床飾り・荘厳は正式な書面などでは伝えられていません。周辺の人たちが伝聞や類推で記した書（『君台観左右帳記』や『御飾記』など）が何点か残され、この床飾りを理想とした後世の研究家たちが強い関心をもって研究し、それにもとづく床飾りが社会一般に定着してゆきます。今日の三具足や五具足などと呼ばれ、またそこから生まれた床の間、神前・仏前、慶弔の儀式などの飾り方、床飾りの決まりごとはここから出発しているのです。

ただ、生け花にかんしてだけは、残念ながら詳細が分かるような資料はほとんど残されていません。今日に伝えられる立花は違う系統の花で、これと区別するために銀閣寺などで床の間で生けられた謎の花を「阿弥系の花」などと呼ぶこともあります。

阿弥衆（あみしゅう）

室町時代の同朋衆（どうぼうしゅう）とは将軍のそばにいて芸道その他の仕事にあたった人々のことです。名前に『阿弥』がつく人たちだったので阿弥衆とよばれることもあります。

将軍の同朋衆にかぎらず、○阿弥というふうに名前に阿弥をつけた人々は室町時代にいろいろな分野で不思議な活躍をしていました。たとえば義政より前の時代、京都・北山に金閣寺を造営した有名な三代将軍足利義満を金銭面の采配で支えていたのも阿弥の名前が付く人たち（善阿弥、一阿弥、式阿弥など）だったそうです。同じ義満に重用され、能を完成させた世阿弥とその父・観阿弥もよく知られます。

鎌倉時代の終わりごろから室町時代にかけて、『時衆（じしゅう）』とよばれる人たちが日本の多くの地域で注目されていました。輪になって踊りながら念仏をとなえ、信仰的な恍惚の表情をみせるこれらの人々の集団は急速に数を

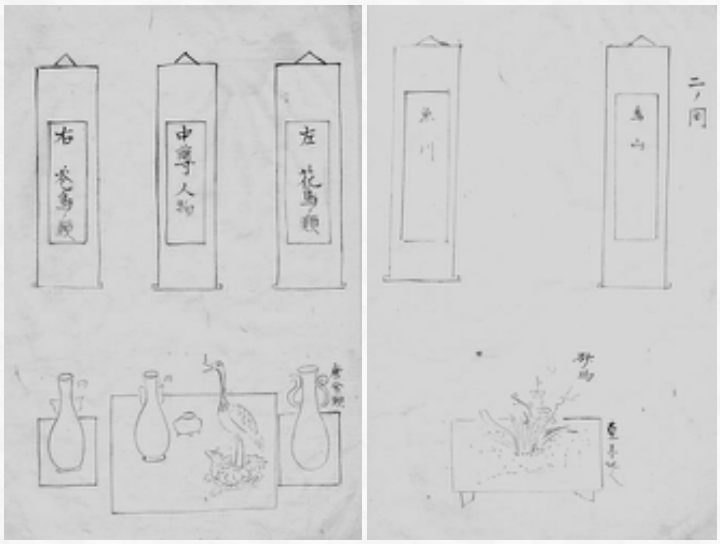
増やしていきました。今日の盆踊りはこれに端を発すると言われ、その盛んな様子がしのばれます。

時衆は鎌倉時代中期に僧・一遍がはじめた「踊り念仏」をする人々のことです。一遍が活躍したのは鎌倉幕府で執権・北条時宗が実権をにぎっていたころで、同じころ蒙古が日本に来襲しています。そして一遍の没後百年以上を経てちょうど義満から義政のころにかけて、つまり室町時代の中期から後期あたりに時衆は最盛期を迎えます。その時衆の人々は「○阿弥」という名前（号）を名乗っていたのです。

時衆の中心の指導者は一遍以来、代々 遊行上人（ゆぎょうしょうにん） とよばれ、一カ所に定住しないことを旨としました。全国を渡り歩きながら念仏や踊り念仏を広め、南無阿弥陀仏・云々と書かれた木のお札を配り歩きました。ふつうの仏教のように本山ができるのは江戸時代になってから、時衆がかなり下火になったのちのことです。そのため、今日ではこの〝宗派〟を「時宗」と呼ぶのが一般的ですが、本山ができる以前の鎌倉・室町時代などでは「時衆」とよぶべきだとされています。あるいは宗教というよりなんらの哲学にもとづいた特別の信仰・文化集団というべきものだったとも言えるでしょう。

時衆の特徴は何といっても念仏です。ナムアミダブツ（南無阿弥陀仏）を口に出して唱えることこそが一番重要だというのは、言いかえれば仏教における 言霊（ことだま） 思想です。この見解によれば、とくにナム、あるいはナームの発音が重要視されていたと考えてよいでしょう。

ナムアミダブツを口に出してとなえる、つまり「称名」をいちばん重視する浄土教の系譜は一遍よりさらに古く奈良時代に渡来したといわれ、平安時代では円仁、源信、空也などが知られ、鎌倉時代に入ってからの法然、親鸞も有名です。若いころの一遍は大宰府で法然の孫弟子に師事したとされます。



（写真）江戸時代のものと思われる床飾りの書より。「荘厳令」と題されている。軸やその他の配置は五行の法則に合っている。

「熊野」の存在

時衆の文化のなかでもう一つ目をひくのが「熊野」です。一遍上人が本格的に遊行をスタートさせるのは熊野本宮で参籠したことが始まりで、一遍の名前もこのときはじめて付けています。もちろんこの種の話は必ずしも事実と言えないことが多いのですが、事実として後世に定着してゆく内容にこそ意味があるという場合が多く、一遍においてはまさにそう考える

べきでしょう。
　熊野は言うまでもなく古来、強い信仰の対象となった最右翼の場所です。その原点は、山岳修験の一大霊場でもあった熊野の奥の広大な紀州の山地でした。
　六代将軍義教のとき世阿弥は佐渡へ配流されますが、佐渡で著した謡曲集・金島書には世阿弥が著した他の多くの能や能楽論とは少し違う内容がみられます。熊野や白山、佐渡の金北山などにかんしてイザナミ・イザナギ神をからめた興味深い記述があり、そこには今日の山岳修験の口伝と重なる部分も多くみられます。金島書の内容は熊野・紀州山地の山岳修験の伝承に由来するものと考えられ、一遍の熊野のエピソードをあわせて考えると、時衆の文化や哲学が実際にどのようなものであったか、その輪郭があらわれてきます。
　熊野の寺社に残された絵などをみていると、たとえば日月は必ず月が左に、日は右に描かれます。日月はアジア古来の哲学では陽と陰で、また火・水とも同義です。阿弥衆が完成させた床飾りにおいて燭台・火＝陽を右に、花と水が入った花瓶＝陰を左に置くのは熊野の伝統と同じなのです。

古来強い信仰の対象となる熊野三山のひとつ、熊野速玉神社（下写真）とその元宮といわれる大きな岩（ごとびき岩）を御神体とする神倉山。和歌山県新宮市。

陰陽五行

　阿弥衆が銀閣寺で行った床飾りは、様々な局面で存在感が失せつつあった古代熊野以来の哲学を、室町将軍家を舞台に生きた芸道・文化として復

活させたものということができそうです。
　それはたんに古い熊野の文化というだけではなく、アジア古来のいわゆる陰陽五行の哲学を芸道で表現するといった性質のものでした。香炉など香りを出すもの・すなわち五行の「土」の性質のものを床の間の中央に配置するのも、あるいは三幅対の軸では人物画は同じ意味で中央に配するというのも中国ではみられないもので、あるいは中国ではたぶん遠い昔に忘れ去られたことで、時衆（阿弥衆）にひそかに伝えられたこの法則を床飾りに応用して実際に配置してみたとき、人々は思わぬ不思議な感銘を受けたものと思われます。この感銘、感動こそが芸術と信仰の中間ともいえる「芸道」の真髄だったのでしょう。
　末期の苦境にある室町将軍家を舞台に花開いたこの文化は、その後どうなったかは分かりません。阿弥衆・時衆が下火になり、その哲学の一部は茶道に受け継がれていったように思います。また江戸中期に江戸などで興った新たな生け花の流派は、当時上方を中心に流行していた立花を生け花ほんらいのものではないとし、あらためてこの阿弥衆の謎の生け花に大きな関心を示しますが、そのことは、かえってこの床飾りの核心ともいえる生け花の部分が闇に埋もれてしまったことを、あるいはもしかしたら生け花だけは未完成であったことを示しているのかもしれません。

熊野本宮は明治二十二年までは熊野川の中洲にあった。

ゆったりとした流れで川原が広い熊野川。（かつての本宮があった中洲のあたりよりやや下流の地）

（樹心院 華林）